

# メディア の 広場

## 体験的eラーニング論

国立大学法人電気通信大学副理事

伊藤 康志

いとう やすし

琉球大学教授、文部科学省生涯学習政策局教育メディア調査官、同地域政策調整官、兵庫教育大学教育研究支援部長等を経て現職。八洲学園大学非常勤講師、日本生涯教育学会理事。著書に共編著「生涯学習 [e ソサエティ] ハンドブック」(文憲堂)等。



## eラーニング大学事始め

2004年度に開学した我が国初の本格的なインターネット大学である八洲学園大学(山本恒夫学長 神奈川県横浜市)で、非常勤講師を担当している。

このeラーニングシステムは、インターネット上で配信されるライブ授業を受ける「スクーリング履修」と、テキストによる自学自習を行う通信授業「テキスト履修」で構成されている。私が担当しているのは、この「テキスト履修」の方で、自学自習が基本であるため、学生との交流はメールによるコミュニケーションのみである。2単位の授業であればレポート(2回)と科目修得試験(私の場合はレポート提出)が課せられ、提出レポートには添削コメントと評価を返している。一度もメールを交換しないまま(つまりコミュニケーションのないまま)修了する学生もいれば、頻りにメールを交換することでネット上の「つながり」が生まれる学生もいる。

個人情報観点からか、私が把握できる学生の情報は名前と学年、科目履修生かどうか、他の履修科目の状況ぐらいで、年齢も学習歴も皆目わからない。学生には私の簡単な略歴と顔写真ぐらいしかわからない(本当は動画によるミニ授業のサービスもあるが私はやっていない)。

## テキストベースのコミュニケーションの 難しさと面白さ

対面によるコミュニケーションであれば、相手とのそれまでの交流や、その人物に関する情報、相手の物腰や表情・声などノンバーバル(非言語的)なものを手がかりに自分なりに判断して立ち位置が自然に決まってくるが、そういったものが一切ない。加えてそこに「教える」側と「学ぶ」側という、ある種の権力関係の擬制があるのでややこしい。オフ会を主催するなどして、そこを埋めようと努力している教員もいるが、私には逆にテキストベースだけでどこまでできるのかという目論見もある。

提出されたレポートに対する添削コメント以外には、学期当初の自己紹介に始まり、大体1週間

に1回ぐらいのペースで学生全員にメッセージを送信している。その際には、学習する内容についてのみならず、私の「人となり」が少しでもわかるように個人的な情報を入れるようにしている。だから、恥ずかしながらネット上では私はすごくいい人になっている。

すぐ返信してくれる学生もいる。そうなるこちらも嬉しくなり、折り返す。こうしたメールのやりとりの中で、おおよその学生の意欲や問題意識、学習の積み上げ、心情などの「輪郭」が見えてくる。文面から年長の方が若い世代かということもわかる。若い世代からのメールは宛名もなく、いきなり本論に入る。例えば「提出のめっ切、本当に守らないとだめですか」といった具合だ。こうした情報を踏まえ、添削コメントの内容やいい返しを工夫している。

もちろん失敗する場合も多い。

学生から自己紹介も含め、熱心なメールが届いたとき、忙しかったのですぐ返信をせず、しばらくそのままにしていたら、学生がそのメールを削除してしまったこと。メールのやりとりでの「私」(激励するやさしい人?)と添削コメントのときの「私」(客観的な評価・採点と厳しい人?)との落差にショックを受けたのか、その後の学習をぱったりやめた学生など。以後、学生からのメールにはできるだけ早く返信するようにしたりなど、一つずつ工夫をしている。もともと外交的で活発な人ほど、ネットでのコミュニケーションを活発に行う傾向があるなど、研究者によって分析・報告されているメール・コミュニケーションの実相を日々感じている。

## つながりの演出

かつてはオンデマンドによるコンテンツ学習が中心だったeラーニングも、ICTの急激な進化によって授業をそのままネットで動画中継するライブ型が中心となりつつある。システム的にもコスト的にもeラーニングは計算できる選択肢になっている。問題はコンセプトと運用の知恵だろう。

結局のところ、大学がどのような教育を実現したいのか、カリキュラムをどう構成するか、各科目をどう展開するかによって、どのようなeラー

ニング方式を採用するかだろう。

運用の知恵で言えば、八洲学園大学・山本学長は、今後のeラーニングの展開について、システムの要素、コンテンツの要素、ヒューマン的要素を挙げ、特にヒューマン的要素の重要性を指摘している。対面とネットでの学習を組み合わせたブレンドッド・ラーニングを志向する大学もあるが、八洲でも正規の授業以外に学生と学生、学生と教員の交流を促す交流会(対面交流にネットで他地域の学生が参加する)を始め、学生から好評と聞いている。私が行った学生アンケートでも自学自習をよしとする一方、孤立感を挙げる学生も多かった。

そもそもeラーニングとは字義どおり、ある程度、学ぶ側の主体性を前提(条件)としている。教育として展開する場合には、この前提を担保するための仕組みが求められるが、それは、学習の継続化支援という直裁的なものではなく、まずは学生が誰かと「つながる」ことが重要ではないだろうか。

## 知のオープン化と学習

一方でYouTubeなど、動画をPCやモバイル端末で電車の中で視聴する風景も当たり前になってきた。先行する欧米に遅れて日本でも、大学の授業そのものを動画コンテンツとしてアップする「知」のオープン化が始まっている。「日本オープンコースウェア・コンソーシアム」には、現在20ほどの大学が会員となっていて、例えば東京大学では、授業のシラバス、講義資料、授業動画を公開している。単位にはならないが、東大に通学しなければ聴けない授業を、電車の中で聴き学習することが普通に簡単にできる。今やこれに限らず、学習するためのコンテンツはあまたネットに「ある」。だから学習者が自分で学習をデザイン(learner design)する時代になるという指摘もある。

ただ、これらコンテンツを縦横無尽に使い倒して学ぶことができる、学習をデザインする力とは、具体的に何だろうか。この有無がデジタル・ディバイドの現代的意味(機会の格差ではない)になるような気がする。